



第1図 捕鼠数と鼠害球数との関係

鼠害は、この地区の農家が鼠害を意識して駆除していた時点での被害であったことから、この範囲内の鼠害球数・生息数の場合の防除では、防除効果が無いことになる。50球/10a（被害球率2%）以上・9頭/10a以上の場合の防除では、その数値が大きい程それだけ防除効果が高まることになり、この地域の農家にとって融雪直後のハタネズミ9頭/10aは、前年秋・防除適期前ににおいて防除の要否を検討する際の有力な指標となる。また、ハタネズミ1頭当りの鼠害量は、10a当り9頭生息していたとすると、積雪中に商品性の全くない球が6個も出ることになり、この球数は全鼠害球のほぼ $\frac{1}{3}$ に相当することから、被害少を含めると、1頭当り18球にもなる。

III 要 約

昭和39, 41, 42年の調査資料を取りまとめ、雪中カンラン畑の野鼠類、ハタネズミとアカネズミの両種の捕鼠状況と食性の違いから、ハタネズミが雪中カンランの鼠害の主因であることを明らかにし、さらにハタネズミの5日間の捕鼠数と鼠害量（商品価値零の球数）との間に $r=0.989^{**}$, $y=7.26x-15.29$ の関係のあることを述べた。

引用文献

- 1) 阿部 禎・大矢剛毅 (1974) 岩手県の農耕地に生息する野ネズミの種類と食性. 岩手農試研究報告 18: 23~29.
- 2) 嘉藤省吾・望月正巳 (1972) 積雪地における野鼠被害実態について 第1報カンランの被害と野鼠密度との関係. 北陸病虫研報 20: 81~85.
- 3) 日本植物防疫協会 (1972) 第2回全国野鼠防除現地研究会テキスト (野鼠の生態, 密度と被害の調べ方) 7~14.
- 4) ——— (1974) 野鼠防除必携 68, 70.
- 5) ——— (1976) 第4回全国野鼠防除現地研究会テキスト 15.
- 6) 農林省農政局植物防疫課 (1969) 野鼠実態調査報告 (富山県) 10.
- 7) ——— (1974) 発生子察職員中央研修会テキスト 56~82.
- 8) 農林省農産園芸局植物防疫課 (1976) 野鼠発生子察実験事業成績 (富山) 24.
- 9) 望月正巳 (1962) 耕地野鼠害に関する生態学的研究. 富山農試特別報告 4: 1~135. (1977年5月25日受領)

本州産ヤチネズミについて

望月正巳 (富山県立技術短期大学)

M. MOCHIZUKI: On the *Clethrionomys rufocanus andersoni* (Thomas)

さきに、本会報に立山・白山・七尾のヤチネズミについて報告したが、この和名・学名については、定評のある原色動物大図鑑⁵⁾によったものである。

すなわち、“やちねずみ *Clethrionomys rufocanus* (Sundevall) 大陸から日本に分布し、北海道と南千島にえぞやちねずみ *bedfordiae* (Thomas), 本州にやちねずみ [一名とうほくやちねずみ *andersoni* (Tho-

mas) (青森・岩手産) とにいがたやちねずみ *nigatae* (Anderson) (新潟・北アルプス・八ヶ岳・赤石山脈等)] がいる。北海道産は頭胴長110mm, 尾45mm, やちねずみ (青森方面) は頭胴長100mm, 尾は65mm内外。にいがたやちねずみは後者より尾は短く55mm内外”と記載されている。

一方、ねずみ駆除ハンドブック⁴⁾には“エゾヤチネズミ

*C. r. bedfordiae*は北海道にだけ分布するが、トウホクヤチネズミ *C. r. andersoni* は東北地方から長野・新潟両県下の山地に生息する種類で、エゾヤチネズミにくらべると尾が長く、頭胴長の60%に達するものがある。……トウホクヤチネズミのうち、長野・新潟両県にいるものは、尾がさらに長く、頭胴長とはほぼ同じくらいのものである。これをニイガタヤチネズミとすることもある”と記載されている。

上記両記載でまず問題になるのは、ニイガタヤチネズミの尾長の記載について、両者全く逆の表現がみられることである。すなわち、原色動物大図鑑では本州産ヤチネズミのうち青森方面のものより尾が短いものをニイガタヤチネズミとし、ねずみ駆除ハンドブックでは尾が長いものをニイガタヤチネズミとしていて、形態上の混乱が生じていることである。

黒田長禮 (1931) 氏が動物学雑誌に原記載から転載したという測定値表によると、ニイガタヤチネズミは頭胴長107mm、尾長63mmで、従って尾長率は59であり、トウホクヤチネズミでは頭胴長120mm、尾長54mmで、従って尾長率45である。いうまでもなく、ニイガタヤチネズミはトウホクヤチネズミより尾が長くなくてはならない。

次に、ねずみ駆除ハンドブック⁴⁾には、ニイガタヤチネズミと呼ぶこともあると、弱い表現がとられていることから、原色動物大図鑑のニイガタヤチネズミ *C. r. migatae* (Anderson) は果して亜種であろうかと疑問が持たれる。

花岡利昌 (1937) 氏は動物学雑誌に八ヶ岳の標本などから、ニイガタヤチネズミはトウホクヤチネズミの同物異名 (synonym) であるとしている。すなわち、トウホクヤチネズミ *C. r. andersoni* (Thomas) の外形 (尾長の個体変異) のなかで、尾が比較的長い個体を (便宜上60mm以上の尾長を持つ個体) を指し、ニイガタヤチ

ネズミと俗に呼ぶことがあると言う程度の名称である。

言うまでもなく、前報^{5,6)}において報告した富山・石川両県のヤチネズミの名称については、ニイガタをトウホクに、トウホクをニイガタに、また *C. r. migatae* を *C. r. andersoni* と自動的に改まる。

地方における自然科学の研究が、無駄なく順調に進むためには、地方にいる専門家や技術者が自己の研究に関連のある貴重な標本・文献を容易に調査することが出来る様、これら標本・文献が身近にあることである。

現在のところ、地方においては貴重な標本・文献を調査することは甚だ困難である。幸にも、農林省北陸農業試験場虫害研究室の織田真吾技官の手を勞わし、貴重な文献を入手することが出来た。同氏に深甚の謝意を表する次第である。

要約 北陸地域内の自然科学振興の一環として、本州産ヤチネズミの名称や外形上の特徴について論じ、本州産ヤチネズミは、ヤチネズミ *Clethrionomys rufocanus* (Sundevall) の一亜種でトウホクヤチネズミ *C. r. andersoni* (Thomas) と称するものであり、このうち尾が長い個体すなわち便宜上60mm以上の尾長を持つ個体をニイガタヤチネズミと俗に呼ぶことにした。

引用文献

- 1) 黒田長禮 (1931) ヤチネズミの新産地と其学名。動雑 43: 661~666.
- 2) 花岡利昌 (1937) 再び本州中部山地の鼠類に就いて。動雑 49: 429~436.
- 3) 北隆館 (1951) 原色動物大図鑑 pp. 63.
- 4) 日本環境衛生協会 (1967) ねずみ駆除ハンドブック pp. 21 0.
- 5) 望月正巳・赤座久明 (1976) 立山山中の野鼠類について (第1類) ハタネズミ属の種類。北陸病虫研報 24: 86~88.
- 6) 望月正巳 (1976) 石川県産のハタネズミ属の標本について (短報)。北陸病虫研報 24: 88.

(1977年5月2日受領)